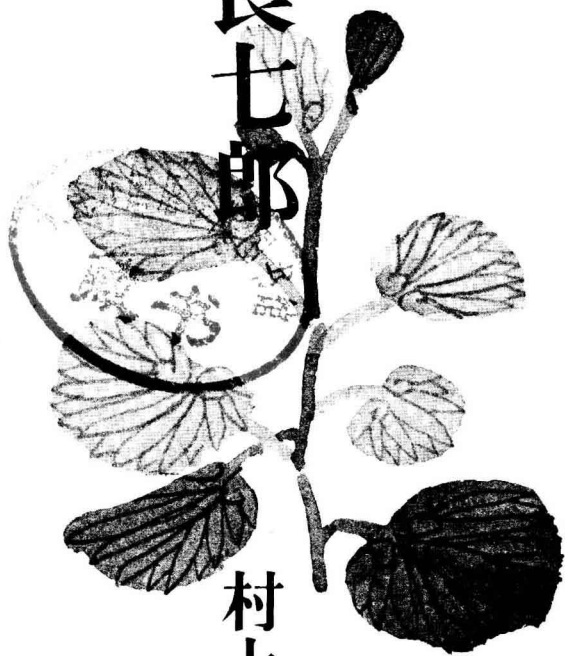


松平長七郎



村上元三

東京文藝社版

松平長七郎

四八〇円



昭和四十一年七月二十五日印刷
昭和四十一年七月三十日発行

著作者 村上元三

発行者 角谷奈良雄

発行所 株式会社東京文藝社
東京都新宿区払方町一
振替・東京二一七五七
電話・(二六〇)二五五〇

松平長七郎

目次

竜虎劇

五

ぎやまん燈籠

五三

黄金鬼

九四

箱根八里

一二五

海坊主

一七五

獅子ヶ嶽

二二五

国姓爺旋風

二五四

装幀 村上 豊

竜虎剣

山王祭

それは、白昼の、ことに天下祭といわれる山王祭の当日の捕物だけに、なおのことすさまじい騒ぎになってしまった。

祭礼には喧嘩口論はつきものであり、町奉行所でも固く取締っていたのだが、この時の起りは、ただの喧嘩ではなく、女が因の刃傷であった。

江戸での天下祭、幕府が特に氏子の町人たちに命じて祭事をさかんに行わせるところから、御用祭とも呼ばれているのは、この山王祭と、もう一つは神田祭のことをいう。

永田馬場にある山王権現の大祭は、一年おきに、六月十五日に行われる。この祭が行われるようになったのは、慶長のはじめ頃からであり、神田明神の大祭とは一

年交代になっている。

山王権現の氏子は、京橋本挽町から西の各町と、八丁堀、霊岸島一帯をふくんでいるので、祭り好きな江戸っ子のことだけに、当日はさかんな賑わいになる。

江戸城内でも月次つきぎの礼を取りやめ、市中では武家町屋とも棧敷を構え、幕を張り、客をよんで御馳走をする。

神輿、神馬などの行列に加えて、四十五番もの山車だしが山下門を出発し、町々を練って茅場町のお旅所に至り、ここで一休みしてから元の本社まで戻るのだが、その沿道は人の垣をきずき、江戸中の人間がほとんど集まったような賑やかさであった。

この正保四年の六月十五日は、例年の通りのさかんな山王祭が行われ、南北町奉行所や寺社奉行所からも警戒の役人たちが出て、混雑を整理していた。

暑い夏の日ざかりで、雲一つない空から、ぎらぎらと陽の光が降りそそぎ、行列の人々も見物も、暑さでゆだるようになっていた。

ちょうど、四十五番目の、牛若丸と僧正坊の山車が通りすぎ、供奉がつづいて、京橋の盛り場、中橋広小路の辻を通過した直後のことであった。

「喧嘩だっ」

広小路に面した料理屋から、すさまじい男女の悲鳴と金切り声が始った。

わあっ、とか、きやっとか名状し難い声が聞え、その店から、顔色を変えた男女が、祭見物の嗜着が乱れるのもかまわず、先を争って逃げ出してきた。

「人殺しだっ」

「誰か、早く、お役人を」

と、口々に叫ぶ声も、こっちへ駆け集ってくる弥次馬の喚き声に消されて、言葉になつては聞えない。

そこは、うつぼ屋という古い料亭で、刃傷のあったのは二階だった。

祭礼を二階から見物するのは禁じられているので、店の者も大ぜいの客も、階下集まっているうちに、二階でそのさわぎが起つたのだという。

まだ芸者などもない時代だが、ほかの料亭と同様、このうつぼ屋でも、下女という名目で、客の座敷で酌をする女たちを何人も抱えていた。

その中に、お福という女がいたが、これがいい器量ながらなかなかの手どりで、自分を張ってくる男を何人も

手玉にとっている中に、五島佐仲という三十年配の浪人がいた。

浪人の居住の、ことにやかましい江戸だし、五島佐仲は何をして暮しているかわからないが、一かどの剣法者であり、金放れもいい。

このところ、お福は佐仲がしつこいので厭気がさし、振りつづけているうちに、今日、佐仲はどこかで祭り酒をのんできたのか、顔が真青になるまで酔って、うつぼ屋へ入ってきた。

何か乱暴をされるといけない、というので、うつぼ屋でも佐仲を二階の裏座敷へあげ、お福に酌をさせているうちに、いきなりお福の悲鳴が聞えた。

あわてて、ほかの女たちが二階へ駆けあがってみると、佐仲が、血刀を片手に、ぬっと廊下へ出てくるところだった。

「お福は言語同断の奸婦ゆえ、斬り殺した。この上は、ここの店の者、残らず皆殺しだ」

もう半分は正気を失っているらしい佐仲が、そう喚くのを半分まで聞かず、女たちは、転がるように段梯子を逃げおりた。

それから大さわぎになったのだが、二階には佐仲のほか客はいないのに、あいにくと、このうつぼ屋の娘、おえんという六つになる女の子が、誰も気のつかぬうち二階へあがつて、さつきから祭礼の山車行列を見物していたのだった。

「人殺しだっ」

「早く、お役人を」

階下で、みんながさわぎ立てるうちに、料理場の血気の男たちが四五人、めいめい棒などを持って、段梯子を駆けあがって行ったが、わっと悲鳴が聞え、二人ほどが、血まみれになって転げ落ちてきた。

段梯子の上り口に、五島佐仲が、大刀を右に、左脇に小さいおえんを引っ抱えて、のそと立っている。

もともと背の高い、ふだんから青い顔色をした佐仲だが、その時の佐仲は、まるで青鬼そのもののような形相であった。

「上ってきたら、みんな斬り捨ててぞ。おれは人質を取っている。この子を助けたいと思うのなら、逃げ路を開け」

と佐仲は喚き立てた。

うつぼ屋の主人夫婦は、小さいおえんが人質に取られた、と知ると、

「ああつ、あの子が」

「おえんを助けて」

気狂いのようになって段梯子を駆けのぼろうとし、ようやく奉公人たちに引きとめられた。

うつぼ屋にとって、なおのこと不運なことには、裏梯子のところは修繕をされていて使えず、二階へあがるのは、この正面の段梯子ただ一つだけだった。

このさわぎは、祭見物の人々が雑踏している中橋小路一帯に伝わり、弥次馬が駆け集ってくるし、警固の役人たちも、六尺棒を抱えて駆けつけてきた。

山王祭の当日だけに、南町奉行、神尾備前守、北町奉行、朝倉石見守、双方の組下が繰り出しているので、大道中での喧嘩なら直ちに取っ鎮めるが、こういう刃傷沙汰は、役人にとっても思いがけない事件だった。

下手人の浪人が、小さい女の子を人質にしているので、うかつには飛び込めない。

それでも、同心たちが数人、段梯子を駆けあがつて、「乱心者め、神妙にせい」

「御用だ」

十手や六尺棒で打ってかかるのを、五島佐伸という浪人は、あざやかに二人ほどを、段梯子の下へ斬って落した。

一方、ほかの役人たちは、表の街路から二階の手すりへ梯子をかけ、それを伝わって二階へ飛び込もうとした。

佐伸は血刀を振りかぶりながら、その梯子を手すりから、どんと突き放した。

「わっ」

声をひいて数人の役人が、梯子ごと下の道へ落ちていった。

「おのれたち」

と佐伸は、もう死んだようにぐったりしているおえんを左脇に抱え、手摺に片足をかけ、

「この上かかってくると、この子供、一突きだぞ」

喚いて、刀の切先をおえんの小さなのだ首へ突きつけた。

「ああっ、おえんが」

「あの子を、あの子を助けて下され」

下の街路で、このうつぼ屋のあるじ夫婦が、わが子の危急に、声をふりしぼって泣き叫んでいる。

佐伸の形相は、もう狂人も同様だった。

役人たちも、この上うっかり飛び込めば、子供のいのちがないと思うので、

「水、水をかけよ」

「竜吐水を運んで来い」

などと叫び合いながら、街路を走り廻るだけだった。

そのあいだに佐伸は、おえんを小脇に抱え、血刀を右にさげて、手摺から屋根の上へ出ると、そのまま屋根を伝わって、ひらりと隣家の屋根へと飛び移った。

「逃げるぞ」

「罅め、罅め」

役人たちが呼び交しているとき、うつぼ屋の向い側の弥次馬の中で、かん高い声をあげている女がある。

「ぐずぐずしてたら、おえんちゃんが殺されるよう。これだけ男がいて誰も助けられないのかい」

それは、中橋広小路の横丁で、江戸紫という料理屋をやっているおれんという女だった。

自分では二十二だといっているが、本当は二十四、五

になるらしい。大柄で、色が白く、肉つきもいい。眼がきわ立って大きく、派手な顔立ちをしているので、若く見える。

江戸紫という、あまり大きくはないが、三カ月ほど前から、ともかく一軒の料理屋を女手一つで切り廻している女であり、男がついているに違いない、と人は思っているが、おれんは自分で男嫌いだといっている。お節介やきが調べてみると、亭主とか旦那とかいった者はなく、本当にひとり身らしい。

おれんの前身は、誰も知らない。以前は、女だてらに男たちを顎で使っていた掬摸の女親分だったという噂もあるが、それも本当のことはわからない。

ともかく、気っぶのいい女で、今日のようなお祭のときは、町内の世話をよく見るし、お神酒所へは酒をどんどん運ぶし、町内でも評判がいい。

酔っ払った時など、いい心持そうに、

「あたしには、天下一の親分がついてるんだからね。何が来たってこわい事があるものか」

よくそういうが、おれんの親分とは何者なのか、誰も知らなかった。

「何をしてるんだよ、さっさとあの浪人、取っ捕まえちまえばいいのに。ぐずぐずしてると、おえんちゃんが殺されちまう」

今朝から祭酒をのんで、いい心持でいるらしく、ぼうっと眼のふちを染め、おれんは金切声で、役人たちを叱りつけている。

「早く梯子をかけて、屋根へ登ったらどうだい。何をぐずぐずしてるのさ」

それを耳にしたらしく、向う鉢巻に十手をさげた町奉行の同心のひとりが、前を走って行きかけて足をとめ、むっとした顔になると、

「黙れ、この女め。子供を助けたいと思えばこそ、われらも苦心しておる。要らざることを申すな」

「だって、ごらんないよ、あの気狂い浪人め、あれあれ、ほかの屋根へ移っちゃったよ」

「わかっておる。黙って引っ込んでおれ。この上何か申すと引くくるぞ」

同心もむかつ腹を立て、となりつけて走り去った。

「何を言ってるんだい。さっさとしないと、おえんちゃんが大変だよ」

わあわあ騒いでいる弥次馬の中で、おれんの声が一ぱん大きい。

屋根の上の五島佐仲は、もううつぼ屋から三軒目の生薬屋の屋根へ移って、左に小さなおえんを抱え、右手に血刀をさげたまま、下の騒ぎを見おろしている。

「竜吐水はまだか」

役人たちが、血眼になって叫んでいる。

竜吐水の水を屋根へかけ、佐仲の足をすべらして召捕ろうという戦法だが、佐仲も、それは計算に入れていた様子だった。

「のぼって来い、これへ。その勇気がなくば、道をひらいておれの逃げ路を作れ。さもないと、この子供を一突きにするぞ」

と佐仲は喚きながら、次の屋根へ飛び移る身構えをしている。

そのうしろのほうから、数人の手先が屋根へ梯子をかけ、じりじり追っていった。

それも佐仲は、ちゃんと知っているらしい。

下を見おろしながら、眼の中にせせら笑いを浮かべている。

「御用だっ」

いきなりうしろから、手先のひとりが、十手をふるって飛びかかった。

わずかに足を引いたきり、佐仲は、無言で、刀をふるった。

真向から斬り下げられ、夏の陽光の中に血しぶきをあげ、悲鳴をひきながらその手先は、ごろごろと屋根を転がり落ちていった。

佐仲のすごい手並を見ると、近づいていた手先たちも、びくっとして、すぐには飛びかかる者もない。

下の街路の、役人と弥次馬が渦をまいて騒いでいる中で、おれんは、足ずりしながら、

「ええ、だらしがないねえ。あんな気狂い浪人の一人ぐらい、さっさと召捕っちゃえばいいのに。早くしないと、おえんちゃんが殺されちゃうよ」

叫んでいるそばへ、近づいていった若い男がある。

おれんのやっている料理屋江戸紫の板前で、名を辰三郎という。

おれんとは古い間柄らしく、主人と家来のような態度で、板前の腕はたいしたことはないが、向う気の強い男

で、綽名を荒神辰と呼ばれている。

年は二十三四であらう、くりくりとした眼玉、少し目が大きすぎるが、それほどまずい男前でもない。

さつきから、おれんの姿を探していたらしく、辰は、汗びっしょりになって、

「姐御、姐御」

「はいっ」

ふり返ったおれんは、こわい顔を見ると、

「人の大ぜい居るところで、姐御とは何んだい」

「すみません。つい呼びつけてるもんで」

「ほかに呼び方があるだろう」

「それでは、おかみさん」

「ではだけ余計だ」

「おかみさん」

「なんだよ」

「築地の御前がお越しで」

「えっ」

おれんは、眼を輝かせて、

「あたしの店へかい」

「だから、お迎えに来たんで」

「いいところへ来て下すった」

走り出そうとしてから、おれんは何を見たのか、急に足をとめた。

「退け、退け」

「近寄るな、寄ると怪我をするぞ」

役人や手先たちが声をからし、ひしめき合う群衆を制している。

その中を、喚き叫んでいる男女に揉まれながら、中橋広小路を、こちらへくる三人の武士の姿がある。

おれんの眼にとまったのは、その三人だった。

まん中のひとりは、眼せき笠をいただき、涼し気な熨斗目の帷子かたびらすがたで、わざと紋はつけていないのは身分を隠すためであらうか。

大小も白柄で、歩みぶりにも、自然にそなわる品のよさが出ている。背は高く、すらりとしている。

その武士をはさんで、守るようにして歩いてくる侍は、ひとりとは、大兵肥満、赤ら顔の、たくましい顔つきで、年のころは四十五六にならう。武芸に達していると見え、岩が歩くような感じであった。

いま一人は、二十五六か、色の浅黒い、眼つきの鋭い

若侍で、これも武芸に長じているらしく、歩きぶりに寸分の隙もない。

「あ、親分だよ」

大きな声でいって、走り出そうとするおれんの袖を、荒神辰が押えた。

「姐御、じゃあねえ、おかみさん。大道中で親分だなんて呼んじゃあいけません」

「お前にいわれなくなつたって、わかつてるよ」

「御前に何を頼もうというんで」

「あれだよ」

おれんは、人殺し浪人の立っている屋根のほうをふり仰いだ。

五島佐仲は、おえんを抱えたまま、こんどは次の家の屋根に飛び移っている。

こうなると、自分の逃げ路を開かせるというよりも、小さい女の子を人質に、役人たちをからかうのが面白くなってきたらしい。

下から見ても佐仲の顔つきは、狂人も同様だった。

「あの浪人退治を、親分にお願ひするわけには行くまいねえ」

「そうですとも。ご身分にさし障りがあるからね」

「お前でも、そんな分別が出るのかえ」

「これはひでえや」

話をしているあいだに、三人の武家は、群集に揉まれながら、佐仲の立っている二階家の下に立った。

「お武家」

それを見た役人たちが、そばへよってきて、

「ご見物になるような事ではない。うしろへさがつておいで下さい。飛ばつちりをうけ、怪我などなさつてもつまりませんぞ」

とがめるようにいうと、大兵肥満の武士が、

「あの子供を早く助けねば、殺されますぞ」

「だから、骨を折っております」

「お手伝いをいたそうか」

うしろの武士が、笠の下から声をかけた。

「なに」

ふり返った役人は、目せき笠の下の武士の顔を見た。

年のころ二十六七であろうか、色白で眼もとの涼しい、立派な顔立ちだった。

衣服に紋はついていないが、顔立ちや姿から、たたび

とではないと察して、役人の態度がていねいになった。

「お手伝い下さる、と申されますと」

「捕方がのぼっていても、この上の怪我人が出よう。

それに、子供のいのちが危うい」

目せき笠の武家は、おちついた澄んだ声でいって、

「宅兵衛、右平次」

ふたりの家来を呼んだ。

宅兵衛と呼ばれたのは大兵肥満の侍で、右平次といわれて小腰をかがめたのは、若いほうの武士だった。

「いかようにいたしましょう」

宅兵衛が、目せき笠の武士に相談するようにいうと、

その武士は、ちょっと考えていたが、やがて二人に、小声で何か指図をした。

「心得ました」

ふたりは一礼して、さっと道を横切ると、その二階家の中へ、すばやく入っていった。

そのあいだにも、佐仲は屋根の上に突っ立ち、下の役人や群集を冷やかすように、血刀を振りながら何か喚んでいる。

「上ってきてみる。みな殺しだぞ」

というような声が、下まで聞える。

抱えられている小さなおえんは、もう泣声を出す気力もなく、気を失っているように見える。

また屋根を這っていった捕方が二人、十手をふりかぶって飛びつこうとしたが、佐仲から刀で切り払われ、あわてて逃げようとしたひとり、足を踏みすべらせて、下へ転がり落ちてしまった。

「さあ、どうだ。まだのぼってくる奴が居るか」

佐中が喚いたとき、二階の裏の物干から、さっきの宅兵衛と右平次と呼ばれた二人の侍が、するすると身軽に屋根へ移っていった。

二人とも、いつの間にか袴の股立ちをとり、襷をかけた身支度をしている。

それを見ると、街路に集っていた群集は、わあっと、どよめきをあげた。

役人たちも、固唾をのんで、見あげている。

さっきの目せき笠をかぶった若い武家は、じっと二人の動きから目を放さずにいた。

若い右平次のほうが、気狂い浪人をおそれる色もなく、すっすつと二階の屋根へのぼっていった。

肥った宅兵衛のほうも、肥満した体ながら、ひどく身軽に、右平次と反対側の屋根へ廻った。

五島佐仲は、目ざとく、まず右平次に気づいたようだった。

血刀を取り直し、じろりと佐仲は見下した。

「なんだ、おのれも刀の錆になりたいか」

喚いた佐仲へ、右平次は下から、おだやかに声をかけた。

「この期に及んで、卑怯な振舞するな。子供に罪はない。こちらへ返せ」

「いやだ」

「心を鎮めてよく考えろ。おのれも侍の一人であろうに」

「人に優れた腕前持ちながら、世に容れられぬおれだ。

けっ、ばかばかしい。こう天下に浪人を増やしたは、政道が悪いからだ」

「おぬし、いずれの浪人だな」

右平次から物やわらかに問われて、佐仲は、ふっと気がゆるんだのか、

「亡き駿河大納言忠長卿が家臣」

「なに」

右平次は聞きとがめて、

「名は」

「おれに討たれる前に聞かせてやろう。五島佐仲」

「では、五島平太夫どのが弟か」

「なに」

聞き返したのは、こんどは佐仲の番だった。

「おれの名を存じているのか」

「天晴れ器量人と謳われた平太夫どのの弟が、世をすねてその有様か」

「待て待て」

にわかに正気を取り戻したようになって、佐仲は、

「それを知るおのれは何者だ」

「平太夫どのは江戸詰、おぬしは部屋住ゆえ駿府へもおむかず、互いに面体を知らぬも道理だが」

と右平次は、りと声を張って、

「わしは亡き殿の児小姓をつとめ、高崎の配所にてご生害の時まで、殿のお側に仕え奉った田村右平次」

「な、なんだと」

「また、それにあるは、お馬廻役をつとめたる三宅宅兵